

——パイロットのきみへ

あの日、ぼくは自分の体を捨てて自分の星へ帰ったよ。
とてきとて長い旅だったけれど、無事にここまで帰って来られたんだ。
それから毎日、きみのいた星のほうを眺めていた。

一人だったけど、さみしくはなかったよ。だって君にも話したでしょ。

「だいじなものは、目には見えないんだ」

そう、ぼくにとって君は「だいじなものの」なんだ。
だから、ぼくの目に君が見えなくても、それはちっとも悲しいことじゃないんだよ。
だって、姿が見えている「だいじじゃないもの」が傍にたくさんあるより、
姿の見えない「だいじなもの」がひとつ心の中にあるほうが、ずっと幸せなことだからね。

でも、あるとき大変なことに気付いたんだ。
君にも昔、話したよね。ぼくの星にいたまっかな「バラ」のこと。彼女の姿がどこにもないんだ！
もしかすると彼女は「だいじなもの」が目に見えないことを知らないかもで、
姿の見えなくなったぼくを探しに行ってしまったのかもかもしれない…。
ぼくはここにいるのに！

ねえ、きみに最後のお願いだ。

きみが伝えてあげてほしいんだ。

「だいじなものは目には見えないんだよ」って。

そうすれば彼女はきっと安心してくれるはず。じゃあ、きみもこれからも元気でね。

——ぼくより

P.S.君の好きだった星の模様の便せんにしてみたよ。喜んでくれるかな。